



蝉
の
か
ら
記
吐
月
終
焉
記
宜
友
撰
全

中村俊定文庫
文庫 18
562





三世中庵乃門よ入一よ色子板高知
 あう一子ちるみ学と教つり十を
 阿母孝海と一兄と一随ひつて
 花よ永よ日月よもきおはにい川一の
 木の葉一くろめやまらもたにま更
 一病子一跡巨羅よよりえあ一と
 中つる能あといといをまをほつるま
 一ま一まこやゆいとをたう案たやと
 まつるまの人まのま子神よ初を佛よ



そのまゝおしりてくすくす
そのはな老師は

苗
と聞かされた力草はちのち
うちも草花のあはれにつづいたる

明月はくろく
明月やぬき月をよそ
弱はいさへさし月をのち
是すすきのゆきをさへし

一月見れば種とやい
よそへ

残るるよきまは秋や
とまひいひ移く七月の
曉乃と世はまぬ
かき浅草は花を
春の仙境に
戸のひし又
かきとたのむ

かゝくお母いかに居しき哉と云
中侍殿へ乃おしき給ふ然も
歎仙母の書に如ふに御子のまこと
言中を御給ふなるをうりよ
いさゝか終業乃ある御一紙書ん
こゝに睡半可妻小冊の有りた
かいつけ侍殿

ふのゆゑ居るは子に御目より

七日

花名や葉は十日もの

初月忌

左川末乃曉朝やそり割

お七の舟橋守り

おろろーやいー夕暮探見月 你松

又 雲 係 糸 又 夕 照 の 魚 養 方

さ 欄 子 枝 の 志 々 路 以 じ て 塵 舟

き ぐん 子 鶴 糸 皆 ち ち ち ち 魚 文

さ 元 と く 舟 路 の 日 和 養 ち ち ち 連 丈

裕 の 中 子 学 ち ち ち ち ち 可 查

菫 百 草 々 々 花 々 々 一 兆

柳 々 々 々 々 々 々 々 相 象

万 性 糸 後 見 ち ち ち ち 遠 尔

み ち ち 子 孫 子 ち ち ち ち 松

探 々 々 々 々 々 々 々 右

さ ち ち 途 乃 ち ち ち 丈

榎 梨 糸 糸 糸 糸 糸 文

今 ち ち 昔 々 々 々 々 々 舟

十
た〜と掃く帚に素と紫
かろけよぬみれ花の袖を
埴の葉と薫る月減る屏の戸を
小桶の味喰にさけき風
いさ〜あち中將姫は訪らん
おろよ〜詠み詠や清〜つと
ま静よ〜つ〜神の告いよ
素か〜あ〜清〜あ〜

象 古 素 尔 舟 北 相 文

素素にちほよ儘ぬるよ
今華に〜と〜降た〜は〜
顔をとれ〜し〜志〜入〜能〜啼
知年不若思に巨艦が〜
木狭乃葉ワ〜く〜十〜浮〜思〜松
た〜園おれ 東不海
新〜よ〜と〜月〜の〜ほ〜舞〜扇
こ〜と〜せ〜と〜〜と〜引〜わ〜

大 象 尔 古 相 丈 北

ふしと下戸をぬり地をこぼ
状たこけしとこに里のと死
夕对子よきとさるに親と死
結ふ、夜にをりし折柳
華子ふとむる石乃と向ふ
石木よまけの牙とと新海若

象 尔 文 舟 北 春

吐月牙すりぬり方々
京都能海のまきまき
おく歌

吐月死なれ能結吐月東と季
三日月やあ化し中子草かき
この曇やせりくろく雲はぬき
かきあけし影にさし秋葉
きをいつた葉の糸残ふかりい

天府 厘舟 陽馬 班象 洗各

人くともそのふせをこのるは
ゆいりやあきふく精舎ふ
さうらや

焼魚の香より人知れぬ
おのころや葉の常は枝とハ

初七日

あゝ〜まふ桶と然し秋の風
耳に残る記念は中にもある

葉の葉子あむ〜葉と海世は
うつろふと影又かき〜あつ月
硯の〜音あふ秋知れぬ
玉と才の世とる〜あつ秋
葉の〜葉知れぬ〜小魚のゆらぬ
玉の珠知れぬ〜さうさす〜
枝ゆら〜さうさす〜
川人知れぬ〜あつ月

魚文

翠羽

遠尔

羽交

海産

文母

小魚

子真

一輪

薄江

青丸

白丸

何一也や月さく之れ影を以て
不語はしきく志たき草いさるる
孤舟のあはれきり一よおきよ
黄たぐ白葉おまき谷ハ咲よら
惜るる一水に枕平結の珠
日すけは紫苑よ水乃あまの那
曉もこの人よしそ秋乃く秋
其お中よ入月照一葉あ稿

佳句
朝光
月止
正意
如帆
水牛
三餘
一兆

お歌おくやま向く葉も花せる
陰たのむ公の木あはれゆらるる
昔あまのそのおあまもや言れ身
橘の實不あはれま一也とます
吾うち一そ水梨子れをうまよ
其まやあまちのせらる墓掃除
おうらに草向あひ一やま向葉
晴はまてく七字のたねをうま

お梅
何人
撰庭
僧推
あまら
まあ
光年
方臺

袖いり川鳴子ぬきく匠の月
月と吐き出やそのま 塚があ
うつらむいさハ成り少秋の蝶
それ共と侍子似ハ菊も草
月入ぬ山光然と立はく

東籬
吐江
七樓
燕系
南左

つづれ初と終と吹きま
東且も路の葉とやちるる家

松千あ、月北名残と西東

上陸
顔名

枯葉よ清ふかりいや秋の蝶
蘭乃糸や消るも月照るる如
くき草と志道と淋し秋の水
なす跡に小葉千中か啼おん
彼れは春一いつらよあのを葉心
月と公千残ふ記念や草の跡
却まき侍白くぬる月

之原
祇川
東枝
行角
善三
味子
徐来

七月乃世にのほとちかふまよ
うきしよまようといわぬ室探の
たのね子あまのちかや入るん
風よりやあまんむな一室探
かゝるもてらちあまのちか
人よて血に泣くもこのま
あまのよとよとよのちか

九月一とくたうか
悔一とくたうか
久我うとうたうか
のちとてハ人よ
目れうちとつとく
覚し一とくたうか
心乃錦ハ花をみち
この備をる多

やのちあま子常よせ成能起臥成たはけ
おしこくくこの徳面とあまのまき
うせのまきいせしけらよたあやハ
あうーくうーとよよとくよあ
あーのくねきハ口井ーふまき
あまのねおア乃井い操能まよ何の
席よやあまのねあまのまきー何い
あけねよまきほくせ成の刺よえ
喉能くを何うあしきこくしき

強何乃あま房とあまいさくく白砂
てまきんまのまきーいよ平平七又
上達の親にまき敵まはまきま
いつて例の名まきまきまきま
まきくまきまきまきまきまきま
祿うまきまきまきまきまきま
賊とまきまきまきまきまきま
まきまきまきまきまきまきま
いこくくまきまきまきまきま

吐月あり

月影を月よこらぬあり

月影

ま川むしれ征子いづこ塚の草

分乞

おちきちやちとけいけい片便

終境

きのふあまふとまぬゆゆ柳まゆ

松葉

けつふふよさくねむいとおも
今更乃やいよかりいあま

そくくちまねち九月をいん

途負

尋ふん草よねふや蝶のかく

山江

るのおやまぬいぬう一麻のあ

吐柳

根よあつ草木のあゆとふ

稲里

くすれや小草の秋もあ乃共

そと

仲も草子残るやあ月の月

素文

故き—の鳴や秋能於火神
 袖ぬりて空け月ハやとて
 之世を問んも人もさし秋の元
 残るる心も心九百能榮の意
 再榮
 連太
 雲友

七十七の雪中夜よそ

冬をくいにふハ涙能九百の取
 氷ぬ鬨能かす子代の侍
 古なる海系糸の友能行けりえ
 古きうつハ能ス〜口をく
 山雲七月のたぬまを上り部
 眞み能梨子よ寄〜を
 夢者
 魚文
 雁舟
 山松
 可妻

糸かけに能化志まわく秋風
中目のおさめぬ子と抱くか子
三弦子世々もねあはれ能言古
一く神あけく今舞の如き能
こころ志めぬ出流さしこころなま
しりも志まわくぬノ費の帯
を付よなるまわくお母の如お母え
後又書しし先謝来むき

春 古 舟 相 文 亦 古 春

しきまわり世のなまる新市埃
三本弦子世々もねあはれ能言古
石の影おえやと様より
有なししも笑ふ山乃を
中ぬまよやのく伊勢路の道守
かまのこころおれたるえ後能
母すこころ難のゆゑなるおけは
町のおこころはくこゝるまよる

文 舟 春 相 古 文 相 古

+

五

うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき
流くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
福原みみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみ
市流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流
まのつるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
名流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか

舟文 杵杵 舟舟 杵杵 舟舟 杵杵

十

口すすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす
代流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流流
板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板
板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板板
百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百
六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六六

舟文 杵杵 舟舟 杵杵 舟舟 杵杵

月見神古照一影さく秋の露
 文来
 今更さあ子取かき厚お古さ成
 清水
 菊をみち人お佛よたる日小
 月を望
 朝家お島七義お袂の事
 史厚
 四大さる床一あさや秋風
 宇平
 菊の糸張紙一と月お名紙か
 下巻
 吾友

子規さる乃松とやむ人の玉あり
 昔昔雪中床お不白軒より
 今乃さ中床よさつち清く
 多し一床さるとのや言ふこの夜
 起ぬの安さるるさゆくとさる
 ああさるお寝さるさるさるの秋乃
 風や後のらんおよ日子井さる一

ちかきりよをぬあ人くみ性
かハおさるしかきもあつは予也
多路のちまみ浅うさまハあま
風よ路にまぬるとを生まあれ
中一はそむか野一とやふい本ハ
あらんのみふと予よあつけりふ
るふさささあささかたさくささい
ささいよおよいささのささおく
あさつるさささあさあさあさあ

一と目あささ一と目あささ
か、さささささささささささ
肉お人くささあさささささ
辞さささささささささささ
ゆつささささささささささ
るよやちまお人よおさささ
世くさみさささささささ
つささあささささささ
はささささささささささ

ふりとみまゝとちのよらう墓
まゝてゝる時

百々日記のやまや待りめん

不白新
深松

志のふらや画の度ふ秋の穴
重雄

たふと詠やゝてふと如月影
下瑞
花菫

紅葉ふてみいれきや袖の衣
雀文

うき秋乃味もつゝお泣の形
庭香

公よ物もし都の秋も花日か
佳節

十月哉まゝ紅葉かあふふ
如鳥

おふるゝとみ聴くも秋巻
百鏡

さすやそ唯秋の風秋の鳥
あや足

しものきけよもれや水の月
万権

笑ふぬ山詠も室一葉葉窓
彭壽

秋 風のそたつふと一葉の跡
その世ふら影かくりし月夜の友
たると古こさぬ葉れあはれ
休乃なよけすまゝ物志の葉
子赫 百瀬 完来

新編

残香るる香もなき秋や蟬のかさ 亡人
ころも甘あふ又生の松 薺老

かくともぬきらぬおぼしころ
よけきりよ依の人よよ路い
あふふよ

見盡しそそしきと娘一帯の雀
かふるふとりの葉と葉い
空の霞人かきこころよ
あやふふ行ふまけし葉まをり
送葉并日跡よとよまら

いふ秋とらふ志不極むと葉が

七日

先七日塚ゆき初と秋の霜

ら七日

暮中いそしき啼らん朝の妻

安永九庚子備目



